

吉野朔実とその漫画

弁護士 住田 浩史



1 はじめに

80～90年代の漫画界を代表する（と個人的に思っている）漫画家の吉野朔実さんが、2016年4月20日に亡くなりました。

とかく、この年代の少女漫画の世界には、文学的といわれる漫画家はたくさんいます（いわゆる24年組より後の世代では、吉田秋生「河よりも長くゆるやかに」、岡崎京子「リバーズ・エッジ」、高野文子「絶対安全剃刀」など）。しかしながら、吉野さんほど、その名に相応しい者はいないでしょう。そう、吉野さんは、文学的どころか、常に、いつも文学のはるか先を行っていたのでした。

しかしながら、あまりに孤高の存在過ぎて、これまで、吉野さんとその漫画は、先の3名ほどは人口に膾炙することがありませんでした。大変残念です。吉野さんの漫画をそれなりに読んだことのある者の責任として、ひとつ、ネタバレにならない程度に、凡庸に、主要な作品の紹介をしておきたいと思います¹。

2 初期（青春小説スタイル）

「月下の一群」（1983）…読んだはずですが、あんまり覚えていません。大学もので、弟の入寮をきっかけに、他人に心を開いていく系のストーリーであったと思います。

「少年は荒野をめざす」（1985）…男2人+女（主人公）1人の青春小説王道スタイル（村上春樹も得意としている）かと思いきや、その後、男2人は完全な脇役に転じて、新たに主人公そっくりの男と年上の作家が現れる。主人公は、自分そっくりの男の中に理想を見るが、その理想の行きつく先は果たしてどこか。これもよく「代表作」と言われていますが、私はそうは思いません。少し冗長か。

「ジュリエットの卵」（1988）…文句なしの代表作です。これも女（主人公）が、双子の兄（もちろん、主人公そっくり）と特別な結びつきを感じるが、その行きつく先は果たしてどこか。プロットは前作と近いですが、結末とストーリーは10倍くらい洗練されており、完成されています。

このように、初期の一連の作品に共通するのは、いずれも、「家族や双子などの閉じた完璧な関係から、いびつな他者にさらされた開かれた世界へ」という話であり、青春小説のエッセンス（要するに「太っちょのオバサマ」の発見²）を体現しているといえます。

3 中期

「いたいけな瞳」（1991）…オムニバス。たしか、裸で家事をする主婦の話が出てきました。これは村上春樹のエッセイにも出てきました（アメリカの新聞記事の引用だったが）が、どちらが初出かはわかりません。こんな話を連載で毎回考えるのはすごいと思いました。

「ECCENTRICS」（1993）…長編。これも双子が出てきますが、上記2長編と異なり、青春小説のクラシックスタイルではありません。

「恋愛的瞬間」（1996）一話完結。書店で手に取るには大変恥ずかしいタイトルですが、最近は電子書籍版も出ているので、男性も気にせず読んでください。

「ぼくだけが知っている」（1996）…主人公は10歳男子。少し早い中二病とそこからの復帰を描いており、むしろ、初期の青春小説群の延長線上に位置づけられます。

この中期の短編あるいは一話完結のスタイルが、吉野さんの真骨頂ではないかと思えます。はじめて読む人は、このあたりの漫画をおすすめします。

4 後期

実は、私は、これ以降の漫画は、あまり読んでいません。惜しくも最後の長期連載となってしまった「period」（2004～）も1巻までくらいしか読んでいません。なお、このあたりから、漫画よりも書評や映画についてのエッセイなどが増えてきます（なお、無類の本と映画好きであることがわかります。）が、これも、実は、あまり読んでいません。

これらを読んでしまうと、もう吉野さんの新しい漫画が読めないという気持ちになってしまうかもしれませんが、なんだかためられますが、ぼちぼち読んでみようと思います。

5 むすびに

ともかくも、吉野さんの数々の素晴らしい漫画に出会えてよかったと思います。謹んで哀悼の意を表します。

1 なお、私が吉野さん及び吉野さんの漫画を知ったのは、今でも覚えているが、小学館の学習雑誌「小学六年生」（1）に別冊付録としてついていた「夏休みには絶対これを読んでおけ」というような書籍紹介であった。当時（おそらく1992年ころ）の「小学六年生」は、なぜか80年代全盛期「宝島」の向こうを張ったサブカル誌であり、みうらじゅんやいとうせいこう、中森明夫らが連載をもっていた。今思えば、ローティーンの読む雑誌としては大変異常な状況であったように思う。なお、書籍では、夢野久作「ドグラ・マグラ」等がやけに推奨されていた。子供によかれと思って学習雑誌を読ませていた親もびっくりであろう。今でもこの別冊付録があれば読みたい。お持ちの方、どなたかお譲り下さい。

2 J.D.サリンジャー「フラニーとゾーイー」に出てくる有名な概念。詳細は、「フラニーとゾーイー」を読んで」（本誌19号10頁）を参照されたい。